トゥッリオ・ロンバルド作、ベルナボ礼拝室のための祭壇彫刻
― 再解釈の試み ―

名古屋大学　須網 美由紀

トゥッリオ・ロンバルド（c.1455-1532）の基準作の一つである本作品（1500-02）は、ヴェネツィア、サン・ジョヴァンニ・クリソストモ聖堂ベルナボ礼拝室のために制作された大型の大理石浮彫であり、19 世紀以降一貫して「聖母戴冠」という主題名が与えられてきた。さらに近年 S・ウィルク（1978）は、サン・マルコ大聖堂所蔵の《トラディティオ・レギス（法の授与）》（13C）の構成が本作品に転用されている可能性を指摘し、従来の「天上での教会の栄光」だけでなく「地上での教会の創設」をも示唆していると解釈した。現在も多数の研究者がこうした解釈に追随している状況にあるが、先行研究にはいくつかの問題点が見られ、解釈の再検討が必要であると考えられる。本発表では、以下の５つの観点から、本作品の図像・主題・機能について新しい解釈の可能性を提示したい。

１）本作品は、聖母が「天の玉座」で「天の女王」として戴冠される伝統的な「聖母戴冠」図と異なり、教会堂を想起させる建物の前にキリストと十二使徒が立ち、ヴェールやマントを身にまとわず、髪を足まで垂らした女性がキリストの前に跪いている点で特異な図像である。この女性はトゥッリオや工房が制作した聖母図像の系譜と異なること、16 及び 18 世紀の作品記述に「聖母」に関する言及が無いことから、少なくとも 18 世紀まで「聖母」として認識されていなかったと考えられ、キリスト教会を具現する「エクレシア」と見なす方が妥当であると推測する。

２）構図的な類似に関して、「トラディティオ・レギス」図以外に「復活後のキリスト」サイクルの図像を新たに指摘する。これまで等閑視されてきた、上半分を占める父なる神や聖霊の鳩の描写と、下に立つ使徒たちの視線は「聖霊の賦与」を想起させるものである。

３）従来の研究で見過ごされてきた細部表現、すなわち、①使徒たちの持物、②キリストの背後の建築モティーフ、③キリストのポーズ、④使徒たちの草履、⑤「戴冠」とされる部分、などに着目し、図像学的な分析と比較を通じて、細部表現の意図、及びその典拠や意味を解明し、総体としての作品解釈に反映させる。その結果、本作品が四福音書全てに記述のある、キリストが復活後 11 人の使徒たちのもとに現れ、全世界へ伝道するように告げる「使徒の派遣」を表しているという仮説を提示する。

４）伝統的な「使徒の派遣」図との図像学的な比較・検討を行う。加えて、トゥッリオと同時代にヴェネツィア圏で活躍したアンドレア・リッチョが、ヨハネ福音書で「使徒の派遣」の直後に記される「トマスの不信」を描いた作品は、本作品から着想を得た可能性を新たに指摘する。

５）ベルナボ礼拝室は「十二使徒」に捧げられており、復活節第二主日に十二使徒を記念する典礼が行われてきた。本作品はこれまで典礼との関連から考察されることはなかったが、同日の典礼における福音書朗読に注目し、本作品とこうした典礼の主題が一致することを指摘することで発表者の仮説を裏付ける。

以上、従来のように「聖母戴冠」を軸として解釈することは適切ではなく、本作品は、教会発生の原点である「使徒の派遣」を基盤として、前景に「エクレシアの祝福」を加えることで、「教会の創設」を讃美し、教会自身も、福音を広め伝えるために、父と子と聖霊によってこの世に派遣されていることを再確認する総合的な図像であると考える。